

Aro/Ace 作品の表象と受容につきまとう

困難と可能性

——日本の状況と照らして

井村 麗奈

はじめに

近年 Aro/Ace¹の登場する作品が少しずつ制作されており、明確に Aro/Ace とは言えない対象も含め、作品分析が行われるようになってきている。こうした研究は主に英語圏で行われており、Ela Przybyl の“Asexual Erotics: Intimate Readings of Compulsory Sexuality”や Anna Maria Ruffino Broussard の“Asexual Dramaturgies: Reading for Asexuality in the Western Theatrical Canon”等があげられる。本稿は、英語圏で行われている先行研究を参照しつつ、日本における Aro/Ace 作品の表象と受容の困難さ、そして可能性について考える。

作品における Aro/Ace 表象と受容に関わる困難には、アセクシュアルが直面する重要な問いが含まれている。つまり Aro/Ace の境界線と不可視性の問題である。先にあげた二つの先行研究では、Aro/Ace の明確な境界線を引かずに、その動的な多様性を保持したまま研究するために、クィアリーディングの方法がとられている。この方法は、ただ問題を回避するだけでなく、明確に Aro/Ace である人物以外のものを対象とすることを可能にし、アセクシュアル研究の幅を広げることに一役買っている。

本稿は、まず Aro/Ace 表象と受容の困難さについて、英語圏と日本で共通している点を整理する。クィアな作品を分析するときと同様に、Aro/Ace 作品を分析するときにも境界線と可視性の問題がつきまとう。1-1「境界線の問題」では、歴史・時間に関する問題とアセクシュアル・スペクトラムの多様性という二点を中心に分析し、これらの困難を乗り越える方法として Ela Przybyl と Danielle Cooper の「アセクシュアルの共鳴(asexual resonances)」を取り上げる。1-2「可視性の問題」では、何が作品の登場人物をアセクシュアル・スペクトラムだと感じさせる

のかを明らかにし、作品におけるアセクシュアル・スペクトラムらしい存在の受容の分断について分析する。

そして第二節から、日本の状況を分析する。2-1 では、1960 年代後半以前の日本を舞台とした作品のクイアリーディングとして、『クイア・シネマ・スタディーズ』の第四章、出雲まろうによる谷崎潤一郎「細雪」の分析を取り上げる。1960 年代後半は、お見合い結婚と恋愛結婚の割合が逆転する重要なタイミングであるため、このような設定を設けた。出雲の分析は、「細雪」の雪子にあるアセクシュアルの痕跡を指摘し、セクシュアルノーマティヴィティの変化を指摘することにも成功しており、1960 年代後半以前の日本を舞台とした作品のアセクシュアル的クイアリーディングの成功例だと言えるだろう。

2-2 では、現代日本で制作され、Aro/Ace 映像作品として受容されている四つの作品『恋せぬふたり』(2022 年) 『そばかす』(2022 年) 『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』(2023 年) 『今夜すきやきだよ』(2023 年)を、アセクシュアル・スペクトラムと思われる登場人物の傾向とアロー(非アセクシュアル、性的惹かれを経験する人を指す)との関係性という二つを軸に分析する。これらの作品では、性的な惹かれや恋愛的な惹かれが「無い」ことが強調されることによって、アローとの断絶も強調されてしまう傾向がある一方で、『今夜すきやきだよ』は他とは異なったアセクシュアル・スペクトラムの描き方を提示しており、異なる表象の可能性が見つげられる。そして最後に、アセクシュアル・スペクトラムな登場人物が幸せな生活を掴み取る条件となっているものに注目し、制度的に結び付けられることのない個人が関係を保ち続けることの難しさについて考える。

本稿は、Aro/Ace 作品の受容と表象につきまとう困難を整理し、その困難を乗り越える方法として「アセクシュアルの共鳴」を位置づけ、この方法を日本で用いる時に注意したいことを、出雲の「細雪」分析という成功例を見ながらまとめる。そして、最後に現代日本で Aro/Ace 作品として受容される四つの作品を分析し、問題点と可能性を整理する。これによって、断定することのできないアセクシュアルの痕跡を見つけるレンズを共有し、Aro/Ace 作品の制作自体はもちろん、直接的であれ、間接的であれ Aro/Ace 作品として受容されるものが増えていくことを願う。

1. Aro/Ace 作品の受容と表象につきまとう困難と「アセクシュアルの共鳴」

1-1 境界線の問題

英語圏と日本で共通する Aro/Ace 作品につきまとう困難として、まず境界線の

問題、「どこまで Aro/Ace 作品と見なせるのか」という問題から整理していく。この問いは、現在の Aro/Ace 言説が形作られていく歴史・時間の問題とアセクシュアル・スペクトラムの多様性という二つがポイントとなっている。

Aro/Ace が現在の形になっていく重要な契機は、2001年にアセクシュアル最大のオンライン・コミュニティ「The Asexual Visibility and Education Network (AVEN)」が設立されたことにあると考えられる。これ以前にも、レズビアンやフェミニストの自費出版雑誌の中にアセクシュアルについて言及するものが確認できるという指摘は行われている²が、AVEN は、「アセクシュアル」という名で言説を蓄積し、「アセクシュアル」という概念が現在の形に至る重要な契機である。AVEN は、行動ではなく性的な惹かれを重視すること、病や禁欲ではなくセクシュアル・アイデンティティとしてアセクシュアルを考えることといったアセクシュアル言説の方向性の土台となっている³。オンライン・コミュニティ上で、当事者による言説が蓄積されたことが現在の Aro/Ace を形作り、その形成は今も続いている。

2000年以前にアセクシュアル・スペクトラムな人間が存在しなかったというわけではないが、現在の Aro/Ace の言説をそのまま過去に適用することができないということには、注意を払うべきである。アセクシュアルが形作られていった政治性、アセクシュアルの共通性の中核をなすセクシュアルノーマティヴィティについて考えると、時間による規範性の変化は重要な点である。

セクシュアルノーマティヴィティは、アセクシュアル・コミュニティから提起された重要な概念であり、これまで様々な言葉⁴で指摘されてきた。Gupta は“Compulsory Sexuality: Evaluating an Emerging Concept”で「すべての人がセクシュアルであるという前提、人々が自らを欲望する主体として経験し、セクシュアル・アイデンティティを持ち、性行為に従事することを強いる規範と実践⁵」を指摘するアセクシュアル研究が多数あることを整理し、セクシュアルノーマティヴィティの議論をまとめた。日本のアセクシュアル研究では、松浦優が「正常な人間ならば他者へ性的に惹かれるのが当然だ」という思い込みを批判する概念として『セクシュアルノーマティヴィティ(sexualnormativity)』という概念が提起されている⁶と紹介し、日本の状況を分析するためにも使用できる概念だと述べた。

セクシュアルノーマティヴィティを意識することで、「アセクシュアル」という言葉が生まれる以前のものに共鳴することが可能になる。しかし、時代や地域による規範性の変化を軽視してしまうと、セクシュアルノーマティヴィティを超越的で唯一普遍なものに仕立て上げる手伝いをしてしまうことになる。アセクシュアルを現代に閉じ込めずに分析し、理解していくことは重要だが、時間の隔たりとセクシュアルノーマティヴィティの歴史も同時に分析対象にする等、注意する必要があるだ

ろう。

二つ目は、アセクシュアル・スペクトラム自体の多様性が、表象における困難、受容の複雑さを生むという点についてだ。アセクシュアル・スペクトラム自体の境界線がとても曖昧なものであること、そしてそれこそがアセクシュアル言説の特徴であることが、表象における困難、受容の複雑さを生んでしまう。

例えば、アンジェラ・チェンは「デミセクシュアリティ」と「グレーアセクシュアリティ」が定義上アロー(非アセクシュアル、性的惹かれを経験する人を指す)な人を指すことがあり、アセクシュアルの言葉はそれによって利益を得られるすべての人に開かれていると説明している⁷。実際、本人の自認が明らかにされなければ、言動のみでアセクシュアル・スペクトラムだと断定することはできない。アセクシュアルの表象は一つで終わるはずがないし、どれか一つの表象が代表になり中心になってしまうことは、これまでのアセクシュアルの言葉や研究の蓄積を台無しにしてしまうことだ。

こうした歴史・時間とアセクシュアル・スペクトラム自体の多様さによる境界線の曖昧さに向き合いながら、Aro/Ace 作品を受容するために、Przybylo と Cooper が“Asexual Resonances: Tracing a Queerly Asexual Archive”で展開した「アセクシュアル的共鳴(asexual resonances)」という方法が役に立つ。Przybylo と Cooper は、クィアの史学を参考にしながら、共鳴に注目することでアセクシュアルのアーカイブを探ろうと試みた。二人は Dana Densmore や Valerie Solanas のような 1960 年代後半から 1970 年代前半のフェミニズム運動のアーカイブにアセクシュアルの痕跡を発見している。⁸

あからさまにアセクシュアルと言及されることのない場所にアセクシュアルの痕跡を見つけ、セクシュアルノーマティヴィティによって不可視化されてきたアセクシュアル的存在の可能性を見つける。この方法は、アセクシュアルの史的アーカイブを探るときだけでなく、作品を分析するときにも有効な方法だ。Przybylo は *Asexual Erotics* で様々な芸術作品やテキストをこの方法で分析している。⁹

「アセクシュアル的共鳴」は、二つの困難を克服し、境界線の問題を保留にしながら、アセクシュアルのレンズを用いて様々な対象を分析することを可能にする有用な方法である。Anna Maria Ruffino Broussard の“Asexual Dramaturgies: Reading for Asexuality in the Western Theatrical Canon”も「アセクシュアル的共鳴」を理論の軸の一つとして、あからさまにアセクシュアルな存在が登場しない作品を分析対象としている。¹⁰

この方法はまた、異なる時間の性愛規範を垣間見ることができるといった利点もある。先ほども指摘した通り、時間の隔たりによる規範性の違い、セクシュアルノ-

マティヴィティの形態の変化は、普遍性や自然視を打ち破る力を持った重要な点である。「アセクシュアルの共鳴」を用いた分析は、規範の変化も分析対象とすることが可能であり、セクシュアルノーマティヴィティを揺さぶる潜在力も持っている。

1-2 可視性の問題

初歩的な話から始めよう。アセクシュアルは端的に言えば「性的惹かれを経験しないこと」だが、性的表現がないだけの作品をアセクシュアル作品だと考えることはできない。表現されていないだけで、裏では性的関係にあるはずだという想定が働くからである。性表現が検閲を受けやすいこともあって、婉曲的な性表現や性的なシーンがカットされることは多々ある。そのため性表現の欠如を恋愛＝性愛のコードで読解することが求められている。

性表現の欠如を恋愛＝性愛のコードで読解することには、セクシュアルノーマティヴィティの影響があるだろうし、批判的に受け止めたいところだが、性的表現がないだけの作品をアセクシュアル作品だと考えることは現状不可能だろう¹¹。同様に恋愛表現がないだけの作品を、アロマンティック作品だと考えることもできない。

ではどうやって **Aro/Ace** 作品だという判断がされるのか。要点の一つは、「無い」ということが問題となる場面が映し出されていることである。アセクシュアルの問題を共有しているということが、セクシュアル・アイデンティティの告白が無くても、その登場人物への共感から「アセクシュアルの共鳴」を可能にする。そして **Aro/Ace** 作品だと感じずにいられなくなる。

しかし、当事者¹²にとっては「無い」ということが問題となる場面によって、**Aro/Ace** 作品であることが可視的になる一方で、そうではない人々にとっては不可視のままにとどまってしまう。**Aro/Ace** 作品においては、可視性の問題はカミングアウトにおける問題と根を共有している。「恋愛が分からない／興味がない」「性的に惹かれるってどういうことか分からない／興味がない」という言葉が、そのままカミングアウトとして受け取られることが無いという現実、映画作品を鑑賞する時にも横たわっている。

「恋愛が分からない／興味がない」「性的に惹かれるってどういうことか分からない／興味がない」という言葉は、アセクシュアル・スペクトラムの説明として用いられる言葉たちだ。アセクシュアル・スペクトラムとイコールで結ばれてもいような言葉なのだが、アセクシュアル・スペクトラムの知名度の低さや、セクシュアルノーマティヴィティによって未来のイメージを支配されているために、カミングアウトの力をはく奪されている。一時的な状態だ、勘違いしているだけで、そういうパフォーマンスをしているだけなど、様々な憶測でアセクシュアル・スペクト

ラムとは結びつかないように無力化されてしまう。

したがって、アセクシュアルやアロマンティック等の言葉を用いない登場人物が **Aro/Ace** である可能性は、多くの場合見逃されてしまうのだ。アセクシュアルの議論が盛んに行われている英語圏に比べ、日本でのアセクシュアル・スペクトラムの知名度はまだまだ低いため、見逃される可能性はさらに高いだろう。当事者は気づくことが可能な場合でも、恋愛や結婚をめぐる「多様な生き方」の問題として、アセクシュアル言説とのつながりが考えられることなく、無力化されてしまう。

次節で分析する『そばかす』と『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』は、どちらもアセクシュアルやアロマンティック等の言葉を用いない映画作品である。この二つの映画は、アセクシュアル・スペクトラムの当事者が見れば、そうとしか思えない人物が主人公なのだが、反応が分かれる作品だ。

この二作品ではアセクシュアルやアロマンティック等の言葉は用いられていないが、性的あるいは恋愛的な意欲や惹かれが「無い」ことが問題にされ、理解されないという場面から、当事者は共感し **Aro/Ace** 作品と判断する。例えば、『そばかす』では、主人公の蘇畑佳純が友達だと思っていた異性に迫られ、「昔からなんだけど、人に対して恋愛が...なんだろう、恋愛感情とか、あとその、性的な?...性的...他者に対しての性的な関心とか、なんかそういうの、ほんとに、全然持たなくて」と語るが、理解してもらえない場面がある¹³。『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』は、主人公の七森剛志が異性から告白され、誰に対しても恋愛感情を抱かないと説明するが、伝わらないという場面から始まる¹⁴。こうした場面から、アセクシュアルやアロマンティック等の言葉が登場しなくても、共感し、共鳴し、**Aro/Ace** 作品だと感じ、アセクシュアル言説と結びつけて理解するようになる。

しかし、これは共鳴を感じることができる者に限った話で、当事者にとっては明確に見えるものが、共鳴しない人物にとっては不可視にとどまっている。これは表象の仕方がまずいといよりも、受容する側に分断があることを証明していると捉えるのが適当だろう。もちろん、アセクシュアル・スペクトラムを表す言葉を作中に用いれば回避される問題ではあるし、それによってアセクシュアル・スペクトラムの知名度が高まるという効果もあるだろう。だが、根本的な問題はアセクシュアルと「恋愛が分からない／興味がない」「性的に惹かれるってどういうことか分からない／興味がない」といった言葉の間にある乖離だ。

アセクシュアル的思考のレンズを広め、橋渡しをしていく必要があるだろう。当事者が **Aro/Ace** だと感じる人物が登場する作品は、人によってはフェミニズムの問題を扱った作品だと感じることがあり、問題系の近さがうかがえる。しかし、フェミニズムの問題を扱った作品だと感じる人には、**Aro/Ace** の問題系や知識への

アクセスができない人が多くいる。この二つを橋渡しすることは、重要であると思われる。

橋渡しをする意味とは何か、アセクシュアルの言語・レンズを通さなければ見えないものとは何なのか。アセクシュアルの言語・レンズの重要な効果は、惹かれの多様さからセクシュアリティで前提とされている連なりを揺るがすことだ。つまり、性的惹かれに中心化されているリビドーとセクシュアリティを再構築することだ。それは、セクシュアルノーマティヴィティによる支配と悲劇を明らかにすることに通じている。どのような惹かれを感じ、何を望み、どう行動するのか。そのすべてが「セクシュアリティ」としての想定からすれば、あべこべのように見えるものがある。アセクシュアル的思考とレンズは、そのあべこべなものを言葉にし、見えるようにしてくれる。

最後に、性的あるいは恋愛意欲や惹かれが「無い」ことが問題にされる場面が可視性の要点となっている以上、描写困難なものも存在することも忘れてはならない。一つは、強い感情的なつながりや絆がある相手にだけ性的惹かれを感じるデミセクシュアル、恋愛意欲を感じるデミロマンティックだ。これらの人々はほとんどアローと見分けがつかない。チェンの指摘するところでは、アセクシュアルに理解のある人でも、デミセクシュアルは「自分は深淵で、生きているものとなら何とでもやるような発情男などとは違うと示したい『フツウの』人々によって使われる自己正当化のための言葉だ」と揶揄することがあるという。また自認や結婚といったアセクシュアル・スペクトラムにとって大きな問題をすでに克服し、老年のアセクシュアルとして生きるものなども描写することは難しい。

性的あるいは恋愛意欲や惹かれが「無い」ことが問題にされる場面が可視性の要点となり続けた場合、アロマンティックでアセクシュアルな青年・壮年期の間ばかりが可視的な存在として **Aro/Ace** 表象の中心になっていくだろう¹⁵。「無い」ことが問題にされる場面は、アセクシュアル・スペクトラムの経験しやすい状況であり、共感しやすい表現だが別の表現方法も模索していく必要があるだろう。

2. 日本の状況と照らして

2-1 1960年代以前の日本を舞台とした作品のクィアリーディング

ここからは日本の状況と照らして、作品における **Aro/Ace** 表象と受容に関わる困難について分析していく。アセクシュアルの歴史からすると、**AVEN** が設立される前、2000年以前のアセクシュアル的存在を現在のアセクシュアル・スペクトラムと全く同じように捉えて分析することには問題があるということを、1-1 で指摘し

た。それはアセクシュアル自体の定義が AVEN によって基礎づけられていったという点を考慮しての時間設定だった。「アセクシュアル的共鳴」は 2000 年以前のアセクシュアル的存在を含めアセクシュアル研究を広げることを可能にしたが、その時セクシュアルノーマティヴィティの歴史性も同時に明らかにすることで、より力強い議論になるというところまでが、1-1 で議論した内容だった。

本節では、「アセクシュアル的共鳴」のようなクィアリーディングによって、日本が舞台の作品の中にアセクシュアルの痕跡をみつける際に考慮したい時点として、1960 年代後半を設定する。この時間設定は、1960 年代後半が日本において恋愛結婚がお見合い結婚を上回る頃であり、日本の恋愛や結婚についての研究で重要な転換点として論じられてきたことから設定した¹⁶。つまり、1960 年代後半は、日本のセクシュアルノーマティヴィティの転換点だったといえるのだ。

性愛と恋愛を結び付け、自然で普遍的なものだとする考え方やロマンティック・ラブ・イデオロギーの歴史は長くない。規範性の変化は、アセクシュアル的な傾向を持つ人間の自意識と関係しているはずだ。つまり何に対して A(否定)なのか、ということとは時代や社会状況によって異なる。わざわざ否定を表明しなければならない状況、何に対する否定が問題になるのかによって、アセクシュアル的存在のあり方は異なるはずだ。

1960 年代後半以前の日本が舞台となっている作品の分析として、本節では出雲まろうによる谷崎潤一郎の小説・映画「細雪」(1936 年から始まる物語)の分析¹⁷をとりあげたい。出雲による「細雪」の分析は、原作小説における雪子のアセクシュアル的痕跡を指摘し、小説の表現の中から旧民法社会での規範を読み取る。そして映画化での表現の変化から、戦後いかにアセクシュアルの痕跡が解体され、大衆化されていったのかを鋭く指摘している。

出雲の分析には、「アセクシュアル的共鳴」もセクシュアルノーマティヴィティという言葉も出てこないが、この二つを上手く組み込んでいるように見える。特に映画化でのアセクシュアルの痕跡の解体と戦後の規範の変化を論じる一文は、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの始まりを垣間見ることができる重要な指摘がされる一文である。したがって、本節は出雲の分析を 1960 年代後半以前の日本が舞台となっている作品分析の成功例として取り上げ、日本における Aro/Ace 作品の表象と受容の可能性、「アセクシュアル的共鳴」という方法の輸入と運用の可能性として捉える。

まず出雲は原作ラストの嫁ぎ行く雪子の「下痢」に注目し、「旧民法社会における未婚女性のお見合い・恋愛・結婚小説『細雪』が最後に『下痢』で終わるという結末は、雪子が最初からちつとも、ぜんぜん、まったく、異性にも恋愛にも関心がな

かったということの、お見合いも周囲の人任せに従うものの内心はまったく縁談のことなど念頭にないようでもあったということの、その時代には名付け得ぬことへの身体的な発露であるかもしれず、今日なら雪子のような性格はクリアあるいはアセクシュアルと呼べるかもしれない¹⁸と分析する。まったく異性にも恋愛にもお見合いにも乗り気ではない雪子は、旧民法社会で婚期を逃した女性の「身の置き所のなさ」や圧力を感じ、気持ちをじっと閉じ込めて嫁ぎに行く。

出雲は、こうした雪子の「不可解な消極性」は見逃される一方で、異性と積極的に恋愛する姉妹の妙子の行動は世間的に問題化され、監視対象となっていく点に、旧民法社会の規範を読み取る¹⁹。恋愛結婚が一般化し、ロマンティック・ラブ・イデオロギーが広がった現代では、妙子の行動は咎められるようなものではなく、アセクシュアル的な性質を持った雪子の方が問題化される。旧民法社会では、恋愛が若者の自由で奔放な振る舞いとして問題視されていたことが分かる。

次に出雲は、三度の映画化へと話を進め、その中でも島耕二監督や市川崑監督の雪子は完全にアセクシュアルの可能性が消し去られ、別の性格に変更されている点を指摘する。出雲はこれらの映画化に、「敗戦後の日本娯楽映画がある時期まで今井正監督『青い山脈』(1949年)に代表されるような民主主義の啓蒙とともに積極的な異性恋愛行動を奨励するメッセンジャーの役割を担っていたこと、その異性恋愛学習推進の方向性はCIE(民間情報教育局)による検閲廃止後もますます内面化されていった一面を²⁰」見て取る。

こうして出雲は、「細雪」という作品からお見合い結婚が主流で、恋愛と結婚が結びついていなかった時代のセクシュアルノーマティヴィティの一面を暴き、それが戦後、異性恋愛を推奨する流れへと変化していったことを分析した。この戦後の流れが、1960年代後半のお見合い結婚と恋愛結婚の逆転を生み、現代に続くロマンティック・ラブ・イデオロギーを構築していった。旧民法社会では、結婚と関係ない恋愛は自由を求める若者の奔放で反抗的な振る舞いと思われ、おそらく自由の一つに組み込まれるものだったが、戦後「自由」や「民主主義」といった言葉と共に進められた異性恋愛・結婚の奨励によって、規範の中に取り込まれてしまう。

しかし、恋愛結婚はいかに周りが圧力をかけても、結局は本人が行わなければ始まらないものであり、ロマンティック・ラブ・イデオロギーといった規範に取り込まれた後でも、最低限の自由と潜勢力を持ったものであると言えるだろう。恋愛結婚は規範に取り込まれても、晩婚化や独身者の増加など、データとしては自由を可能にしたと捉えることもできる。だが、現在も恋愛結婚が主流なことは変わらないが、近年では晩婚化に焦った親がお見合いを組むことも見られるようになっており、下降一直線だったお見合い結婚のデータは2015年以降上昇傾向にある²¹。ロマンテ

ミック・ラブ・イデオロギーの失敗が、お見合い結婚の復活として現れる現在は、1960年代後半の流れからまた新たな局面にあると考えられ、2015年をターニングポイントとした日本のアセクシュアル研究は必要かもしれない。

アセクシュアルという言葉が生まれる以前のアセクシュアル・スペクトラムの存在を想像し、可能性を考えることは、現在と未来のアセクシュアル・スペクトラムにポジティブな力を与えてくれる。本当にアセクシュアルな存在だったのかではなく、「アセクシュアル的共鳴」を感じずにいられない存在として、雪子のような人物を分析し、その表象の変化からセクシュアルノーマティヴィティの変化を感じ取る出雲の論は、1960年代以前のアセクシュアル的クイアリーディングとして素晴らしい。「アセクシュアル的共鳴」という方法とセクシュアルノーマティヴィティの歴史性という二輪を応用することで、1960年代以前の日本が舞台となった作品を分析すること、またそうした研究を受容することは、より容易になるだろう。

2-2 現代日本で制作されている Aro/Ace 映像作品

本節では、『恋せぬふたり』（2022年）『そばかす』（2022年）『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』（2023年）『今夜すきやきだよ』（2023年）を対象に、現代日本における Aro/Ace 作品を分析していく。『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』と『そばかす』は、性的指向や恋愛指向を表す単語は出てこないが、当事者にとっては明確に Aro/Ace を描いた作品であり、Aro/Ace 映像作品として受容されているため、分析対象に加えている。

まずこの四作品で共通しているのは、アセクシュアル・スペクトラムの中でも、アロマンティックと思われる人物が登場している点である。次に多くみられるのはアセクシュアルで、これは性的惹かれに関する告白が行われていない作品が二つあるため、四つすべてに共通するとは言えないが、性的惹かれに関する表現としては唯一ものだった。性的惹かれに関しては「ないからわからない」という表現に偏っている。どの作品も「恋愛しない」ことに重きを置いており、アセクシュアル・スペクトラムの重要な多様性を表現することは、なかなかできていない。

アセクシュアル・スペクトラムの中でアセクシュアルとアロマンティックの割合が高いのは、統計的な事実だ。As Loop による 2022 年の調査では、恋愛指向の惹かれについてはアロマンティックが 44.9%、性的惹かれについてはアセクシュアルが 62.1% で最も割合が高かった²²。Aro/Ace 作品が制作され始めたばかりなので、アロマンティックとアセクシュアルに表現が偏るのは当然のことかもしれない。だが、映像作品がアロマンティックとアセクシュアルの表象に偏っていくことで、アセクシュアル・スペクトラムの中に中心と階層ができあがってしまう恐れがある。

また、アロマンティック・アセクシュアルに表現が偏ることで、これまでアセクシュアル・コミュニティで行われてきた恋愛感情と性的惹かれが同一視されてしまうことへの抵抗が不可視化されてしまう。例えば、先ほども引用した『そばかす』での蘇畑佳純の告白、「昔からなんだけど、人に対して恋愛が...なんだろう、恋愛感情とか、あとその、性的な?...性的...他者に対しての性的な関心とか、なんかそういうの、ほんとに、全然持たなくて」という告白は、確かにアロマンティック・アセクシュアルが経験する痛みと困惑が混ざったリアルで共鳴を止められないものだった。だが、もしアセクシュアル・スペクトラムの表象がこれに中心化されてしまったら、性的な惹かれと恋愛的な惹かれの区別や惹かれ自体の多様性といった問題系は捨て置かれてしまうだろう。今後多様な表象が現れてくること、そして私を含め受容する側にも「アセクシュアル的共鳴」を可能にするレンズが広がり、明言されていない曖昧なものへの感度が高まっていくことを期待したい。

ここからは、アローとの関係を軸に四つの作品を分析していきたい。『今夜すきやきだよ』を除く、三つの作品ではアセクシュアル・スペクトラムと思われる登場人物とアローだと思われる人物の別れが強調されているように見える。

NHK ドラマ『恋せぬふたり』は、アロマンティック・アセクシュアルの男女、兒玉咲子と高橋羽が恋愛なしで家族になる物語だ。主人公の咲子は、まず高校時代からの親友、門脇千鶴とルームシェアをする予定だったが、千鶴は咲子のことが好きで自身がレズビアンであることを自覚し、咲子と距離をとるようになる。次に、同僚で元カレの松岡一は、次第にアセクシュアルについて、そして咲子と高橋の関係について理解するようになり、「恋愛なしで家族になるの、俺でもよくない？」と提案する。だが、咲子は一にとって、恋愛や性的な関係がどれだけ大切なものか分かるからこそ、一緒にはいられないと断る。

一とはその後も仲のいい同僚として友達のような関係が続いており、千鶴との関係も千鶴の気持ちが悪く落ち着いたらまた会いたいというように完全な決別というわけでない。家族も少しずつ理解していってくれる様子が描かれており、全体を通してアセクシュアル・スペクトラムとそれ以外の人間が対立せず、分かり合える可能性が示されている。その一方で、一の提案を断った咲子の言葉は重くのしかかっているように感じる。

映画『そばかす』は、より一層アローとの断絶が強調されている。主人公・蘇畑佳純は、同性愛者の同僚やヘテロな周りの人間から理解されず、母に無理やりお見合いに連れていかれる。お見合い相手・木暮翔も同じように、結婚を望んでいないのに無理やりお見合いをさせられていることを知り、二人は友達になるのだが、結局相手の恋心によって関係は終わってしまう。佳純は自分の状態を説明したうえで

(上述の告白のセリフ)、二人が一緒にいられる関係はないだろうかと提案するが、理解されずに終わってしまう。

次に登場するのは、元 AV 女優の世永真帆。真帆は佳純が恋愛に興味がないということに一定の理解(あるいは許容)を示しているようだった。佳純はアロマンティックという言葉を使わないので、告白がカミングアウトとして機能しなかった可能性もあるため、アロマンティックを理解してくれたとは取れないが、二人は友達関係を深めていき、ルームシェアをしようという話になる。だが、真帆が元カレとよりを戻し、結婚することになったため、ルームシェアは実現されることなく、水疱に帰した。『恋せぬふたり』と似た展開だが、『そばかす』ではフェミニストな真帆が元カレとの結婚という「幸せなゴール」を迎えるために、佳純が置いて行かれる形式となっている。

この映画のラストは、新しい同僚が同じように恋愛に興味がない人間だということを知り、佳純が一人じゃないなら大丈夫だと、なんとなく前向きになった場面で終わる。佳純の心は少し強くなったかもしれないが、実際のところは何も解決していない。異なるセクシュアリティの人間とは理解しあえないまま(家族を含む)、理解してくれたように思えた翔や真帆は、恋愛や結婚のために佳純との関係を切り捨てる。結婚式後、スクリーンに真帆が映ることはない。

アロマンティックらしい新しい同僚とは、友達になりそうな予感はあるが、それが本当に救いになるのかは不明なままだ。翔や真帆の時のように、また佳純は一人残されてしまうかもしれない。異性愛恋愛と結婚のために、関係を失っていく佳純の未来の暗雲は、ちょっとした幸せ気分で覆せるようなものではないだろう。新しい同僚は「アロマンティック・スペクトラムの人間」だから救いとなるのだろうか。作中ではこういった言葉は用いられていないため、新しい同僚と翔や真帆の違いは明確ではない。

また、もし新しい同僚は「真」のアロマンティック・スペクトラムなのだとしたら、その描写にはアセクシュアルのステレオタイプとして批判されてきた要素が含まれている。マイペースで協調性に欠け、感情の乏しい変わった人間という表現は、何か欠けていて機械的で冷たい壊れた人というようなアセクシュアルの否定的ステレオタイプと似通っている。

次も映画作品、『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』を分析していく。この作品は、めずらしく男性アロマンティックだと思われる七森剛志が主人公の作品だ。男性アセクシュアル・スペクトラムの描写も注目したいところだが、本節ではアローとの関係についての分析のみにとどめておく。

まず七森とアローの関係として大きな出来事は、同じぬいぐるみサークルに所属

している白城ゆいと付き合うが、破局してしまうところだろう。その後もサークル仲間としての関係は続いているが、付き合いっていた頃のような、仲のいい友達のような関係ではなくなる。七森は、そもそも自分が恋愛感情を抱けるのか、恋愛できるのかを試すために、白城に付き合いおうと申し出た。この行いは褒められたものではないし、二人の関係がうまくいかないのは分かっていた結果だった。

そのあと七森に不幸な出来事が続き、最後の衝撃となったのが、アローな友達と飲みに行ったときに言われたことだった。「七森、朝倉さんのこと好きじゃなかったっけ?」「てか、剛志さ、絶対童貞でしょ」この会話がキーとなって、七森は家に引きこもってしまう。そんな七森を救い出すのは、同サークルの麦戸美海子である。麦戸は人が痴漢されている現場を見てしまい、怖くて外に出られなくなってしまった人物で、広く見れば一時的ではあれ、アセクシュアル・スペクトラムに接近している。結局、七森を救い出すのは、同族ともとれる麦戸だった。

この作品はやさしさが主題で、白城はぬいぐるみと話さない特異な登場人物だ。ぬいぐるみとしゃべらない白城が優しくないというわけではないが、白城の感覚は繊細で優しすぎるために、ぬいぐるみとしゃべるサークルの面々とは異なっている。白城はぬいぐるみサークルの他にもサークルに所属しており、そのサークルではセクハラまがいのことが行われているらしい。しかし、白城は安心できる場所なんて少ないからと、そうした現実を諦めて受け入れている。人が痴漢されている現場を見て、そうしたことが横行している現実で生きられないと感じる麦戸とは異なっている。麦戸が七森を救い出すという展開は、やさしさという面でもあるべき展開だったと読める。

このように、三作品はアローとの関係よりも同族との関係によって救われるという傾向がある。これは、「無い」ことが問題とされるシーンからアセクシュアル性を表現する作品にとって、ある程度仕方のないところかもしれない。最後に分析する作品、ドラマ『今夜すきやきだよ』は四作品のなかで唯一、「無い」ことが問題とされるシーンが直接的にはなく²³、対立や断絶ではなく他のセクシュアリティの人々とともに生きていくところが描かれている。

アロマンティックのともこは、恋愛体質で家事能力のないあいこと共同生活をしており、あいこが彼氏・杉浦ゆきと上手くいくように手伝っていく。『そばかす』のように、あいこが彼と結婚することで、ともこは捨てられてしまうのかと思われたが、あいこはゆきと同じマンションで別居婚をすると決断し、ともことの共同生活を続けていった。あいこが出産してからは、あいこはゆきの家に居ることが多くなり、結局ゆきと同居するようになるが、同じマンションに住んでいることもあって、「人生の仲間」としての距離感は変わらなかった。異性愛家族の多様な形によって、

アロマンティックなどもこの未来も肯定的に描かれている点が本作の特別な点であり、前述の三作品とはかなり異なっている。

物語の核となっているのは、あいことゆきの関係だ。二人の恋愛関係において、ともこはクィアな視点で二人にとって最適な選択ができるように手伝う助力者の立場にある。ともこがアロマンティックであることは、あいこへの簡単なカミングアウトのシーンで明かされるが、その後あまり言及されることはない。過去の悪い幻想が現れることは何度かあるが、物語の主軸はあいことゆきの関係、アセクシュアルの問題というよりはフェミニズム的な問題を扱った作品だといえるかもしれない。とはいえ、アセクシュアルとフェミニズムの距離はとても近いので、わざわざ分けるよりも、橋渡しをしていく方が有効だと思う。本作では、異性愛恋愛をしている二人へアセクシュアル・スペクトラム的視点を提供する形で、アロマンティック性が間接的に表現される。

ともこは、可視性の問題で指摘した「無い」ことが問題とされるシーンに偏ると描き出せなくなる存在の要素を持っていると思われる。年齢はまだ若いが、自身のアイデンティティの問題を一度乗り越えた人間、アロマンティックという自認をすでに得ている人間のしなやかさのようなものがある。モヤモヤする現実につぶかることはあるが、それで自己喪失するリスクはかなり低くなっている。そのため、ともこはアローとの対立を強調しないアロマンティック表象になっている。

『今夜すきやきだよ』は、「人生の仲間」として補欠の村山しんたを含んだ、計4人のグループとしての関係が描かれている。2022年As Loopのアンケート調査では、恋愛愛的でも性的でもない関係のパートナー等として、グループを望むと回答した人は、15.2%だった。1人、パートナーを望むが44.1%で最も割合が高い結果だったが、アセクシュアル・スペクトラムの中にも仲間や生活を支え合える関係を望む人が多くいることが分かる。

理想のパートナー等②

64. 恋愛でも性的でもない関係のパートナー等を望みますか。一番近いものを選択してください。

(n=2310)

望まない	17.1%
1人、パートナーを望む	44.1%
複数人、パートナーを望む	7.9%
グループを望む	15.2%
考えたことがない	11.3%
その他	4.4%

望まない: 質問 66 に進む

1人、パートナーを望む: 質問 65 に進む

複数人、パートナーを望む: 質問 65 に進む

グループを望む: 質問 65 に進む

考えたことがない: 質問 66 に進む

その他: 質問 66 に進む

無回答: 質問 66 に進む

24

『今夜すきやきだよ』はグループとしての生活を理想的に描きだしてくれたが、あいことともこの同居が解消された時、それでも距離感を維持できた理由は、ともこが仕事で成功して、一人で同じ部屋を借り続けるだけの財力(そのマンションは家賃 18 万)を手にしていただ。この物理的な距離の問題を克服できたことが大きい。そもそもあいことともこの共同生活が始まった理由は、フリーランスの仕事で収入が少ないが家事能力の高いともこと、家事能力はないがバリバリのキャリアウーマンあいこの利害が一致していることだった。ともこがスランプを抜け出し、18 万のマンションを一人で借り続けられる収入力を得ていたことは幸運に他ならない。制度的に結び付けられることのない個人が関係を保ち続けることはそう簡単なことではない。

最後に論じたいのはこの点だ。ロマンティック・ラブ・イデオロギーのようなイデオロギーによって結び付けられることのない個人、望ましい関係を模索する個人同士の関係を保つことは容易なことではない。前述の NHK ドラマ『恋せぬふたり』では、最終的に咲子と高橋は別居することになる。高橋が農家になることを咲子が応援するからだ。それでも二人が家族だと言える、信じていられるのは、咲子が高橋の大切にしている祖母から受け継いだ家で待っているという構造が、大きな助けになっているように思う。縁を結び続けてくれる物として、家は大きな力を持つ。

縁を結び続けてくれるものといえば、その最たるものは婚姻だろう。As Loop の同調査において、同性婚の制度利用を望むと答えた割合は 11.2%、やや望むと答えた割合は 17.2%。合計すると、28.2%のアセクシュアル・スペクトラムが同性婚に関係すると考えられる。同性婚の問題はそのまま同性愛者の問題だと思われがちだが、アセクシュアル・スペクトラムにとっても重要な問題だと言える。

74. 日本で(戸籍上)同性間の婚姻が法制化された場合、その制度の利用を望みますか。
(n=2245)

望む	11.2%
やや望む	17.2%
どちらでもない	20.6%
あまり望まない	7.3%
望まない	19.6%
考えたことがない	24.2%

25

『今夜すきやきだよ』は、異性愛家族の多様な形によって、アロマンティックなともこの未来を肯定的に描き出してくれた。異性愛結婚の多様な形態や同性婚のみならず、自由に家族を作れるようになることが、アセクシュアル・スペクトラムにとっての肯定的な未来へ繋がっていくだろう。一緒に生きていきたい人(達)と、縁を結び続け、制度的な問題や物理的な問題を解決していくとき、家と婚姻の問題は重要だ。こうした問題が変化していくことで、作品内のアセクシュアル表象の可能性も広がっていくだろう。17.1%のパートナーを望まないと回答した人も含め、アセクシュアル・スペクトラムの多様な生き方の可能性が描かれることを期待したい。

おわりに

本稿は、まず **Aro/Ace** 作品の受容と表象につきまとう困難として境界線の問題を整理し、その困難を乗り越える方法として「アセクシュアル的共鳴」を位置づけた。次の可視性の問題では、恋愛的惹かれや性的惹かれが「無い」ことが問題とされるシーンによってアセクシュアル性が表現されることで、視聴者の反応が二つに分断されること、そしてそうした表現では描き出せないアセクシュアル・スペクトラムの存在や蓄積されてきた重要なアセクシュアル言説があることを指摘した。

第二節「日本の状況と照らして」では、「アセクシュアル的共鳴」を日本で用いる時に注意したい時点として、1960年代後半を設定し、出雲の「細雪」分析という成功例を見ながら、「アセクシュアル的共鳴」とセクシュアルノーマティヴィティの歴史性を分析する視点の力を確かめた。そして、最後に現代日本で **Aro/Ace** 作品として受容される四つの作品を分析し、第一節の可視性の問題で展開した「無い」ことが問題とされるシーンに頼ることの問題と、それ以外の表現の可能性について論じた。

こうして、様々な困難につきまとう **Aro/Ace** の表象と作品の受容の方法と可能

性について整理してきた。アセクシュアルの境界線は曖昧だが、その曖昧さに多様性への開かれがある。この曖昧さを保ちながら、アセクシュアルの痕跡を見つけ、セクシュアルノーマティヴィティの歴史性を暴くことはとても重要な仕事だ。こうした視点は研究者のみならず、あらゆる人が持つようになることで、Aro/Ace 作品として受容されるものは増えていくだろう。多様な Aro/Ace 作品の制作もちろんだが、Aro/Ace 作品として受容されるものが増えていくこと、多くの人々がアセクシュアルの痕跡を見つげられるようになることを願っている。

¹ Aro/Ace はアロマンティックの Aro、アセクシュアルを表すエース (Ace) で構成された言葉。アセクシュアル・スペクトラムと同義で、アセクシュアルやアロマンティックの問題に関係するものを包括して示すときに用いられる。

² Julie Kliegman, “How Zines Paved the Way for Asexual Recognition,” *them* (2019/11/6).

<https://www.them.us/story/asexual-zines>

Ela Przybylo and Danielle Cooper, “Asexual Resonances: Tracing a Queerly Asexual Archive,” *GLQ: A Journal of Lesbian and Gay Studies* 20, no. 3 (2014):297-318

<https://doi.org/10.1215/10642684-2422683>

³ アンジェラ・チェン, 『Ace: アセクシュアルから見たセックスと社会のこと』羽生有希訳, 左右社, (2023), 44-49.

⁴ compulsory sexuality (Chasin 2013; Emens 2013), sex-normative culture (Cerankowski and Milks 2010), sexualnormativity (Hinderliter 2009; Chasin 2011, 2013), sexsociety (Przybylo 2011), and the sexual assumption (Carrigan 2011)

以下からの引用。

Kristina Gupta, “Compulsory Sexuality: Evaluating an Emerging Concept,” *Signs*, 41(1):134

⁵ Kristina Gupta, “Compulsory Sexuality,” 134

⁶ 松浦優, 「アセクシュアル研究におけるセクシュアルノーマティヴィティ (Sexualnormativity) 概念の理論的意義と日本社会への適用可能性」, 『西日本社会学会年報』18, (2020) :89.

⁷ アンジェラ・チェン, 『Ace: アセクシュアルから見たセックスと社会のこと』, 66-67.

⁸ Przybylo and Cooper, “Asexual Resonances.”

⁹ Ela Przybylo, *Asexual Erotics: Intimate Readings of Compulsory Sexuality*, Columbus: Ohio State University Press, (2019).

¹⁰ Anna Maria Ruffino Broussard, “Asexual Dramaturgies: Reading for Asexuality in the Western Theatrical Canon” (2022). *LSU Doctoral Dissertations*. 6001.

https://digitalcommons.lsu.edu/gradschool_dissertations/6001

¹¹ 「アセクシュアルの共鳴」を広く用いれば、画面に映っている間だけでも、恋愛の・性的関係を人生の中心においていない登場人物の存在が、アセクシュアル・ス

ペクトラムとしての人生を肯定するものであるとも言えるかもしれない。恋愛的・性的関係を描かなくてもドラマチックに充足して見える物語を見て、励まされるなど緩い共感が生まれることはありえる。しかし、現状ではそうした解釈は主流ではない。

12 アセクシュアル・スペクトラムの問題系に関心や親和性があり、共感できる人物くらいの広い意味での当事者。

13 玉田真也（監督）、『そばかす』、ラビットハウス、2022年、104分

14 金子由里奈（監督）、『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』、イハフィルムズ、2022年、109分

15 とはいえ、Ace Community Survey Teamによる調査でも、日本語話者に調査範囲を絞った As Loop(アズループ)の調査でも、アセクシュアル・スペクトラムを自認する人の年齢層は、青年・壮年の層に偏っており、45歳以上の数はとても少ない。それがセクシュアルノーマティヴィティの非対称性の問題なのか、調査がウェブ上で行われているというアンケートの性質なのか、アセクシュアルの広がり近年のものであるせいなのか、特定はできない。しかし、現在アセクシュアル・スペクトラムと自認する人は間違いなく年をとっていく。アセクシュアル・スペクトラムの表象が青年・壮年に偏ることは、アセクシュアルとして年を取っていくことを想像することを困難にする一因だ。

16 加藤秀一、『<恋愛結婚>は何をもたらしたか』ちくま新書、(2004)。「第16回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）」、国立社会保障・人口問題研究所、(2023)、48。

https://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou16/JNFS16_ReportALL.pdf

資料の公開は2023だが、調査は2021に行われた。

17 出雲まろう、「第4章「崩壊へと横切りする世界」」、『クィア・シネマ・スタディーズ』菅野優香編著、晃洋書房、(2021):56-73。

18 出雲まろう、「第4章崩壊へと横切りする世界」、62。

19 出雲まろう、「第4章崩壊へと横切りする世界」、62-63。

20 出雲まろう、「第4章崩壊へと横切りする世界」、69。

21 「第16回出生動向基本調査」、国立社会保障・人口問題研究所、48。

22 As Loop、「アロマンティック/アセクシュアル・スペクトラム調査 2022 単純集計結果報告書」(2023)。

23 本ドラマなかでは第三話「愛が詰まった参鶏湯」がアロマンティックに焦点をあてた回であったが、そこでも言い合いのような対立ではなく、「当然恋するだろう」という押しつけにモヤモヤするというような表現だった。ほかの作品と比べて柔らかい表現になっている。

24 As Loop、「アロマンティック/アセクシュアル・スペクトラム調査 2022 単純集計結果報告書」(2023):28。

[https://asloop.jimdofree.com/aro-](https://asloop.jimdofree.com/aro-ace%E8%AA%BF%E6%9F%BB/%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E7%B5%90%E6%9E%9C/2022%E5%B9%B4%E5%BA%A6/)

[ace%E8%AA%BF%E6%9F%BB/%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E7%B5%90%E6%9E%9C/2022%E5%B9%B4%E5%BA%A6/](https://asloop.jimdofree.com/aro-ace%E8%AA%BF%E6%9F%BB/%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E7%B5%90%E6%9E%9C/2022%E5%B9%B4%E5%BA%A6/)

25 As Loop、「アロマンティック/アセクシュアル・スペクトラム調査 2022 単純集計結果報告書」(2023):32。

Reception and Representation of Aro/Ace Works Difficulties and Possibilities: Considering the Japanese Situation

Reina IMURA

This article addresses the methods and possibilities for the reception of aro/ace representations and works, which are fraught with various difficulties. The boundaries of asexuality are ambiguous, but this ambiguity allows an openness to diversity. Keeping this ambiguity, finding traces of asexuality and exposing the historicity of sexual normality are critical tasks. This article aims to identify the related methods and possibilities.

First, it identifies the problem of boundaries as a difficulty that haunts the reception and representation of aro/ace works, and position Ela Przybylo and Danielle Cooper's "asexual resonances" as a method for overcoming this difficulty. Next, it discusses the problem of visibility as a difficulty that accompanies the acceptance and representation of aro/ace works and shows how asexuality is expressed through scenes in which the "absence" of romantic or sexual attraction is considered a problem, which divides viewers' reactions into two, and how asexuality cannot be depicted through such expressions.

Second, based on the situation in Japan, setting the late 1960s as a turning point and examining Izumo's successful analysis of "Sasameyuki", this study confirms the power of a perspective that analyzes the historicity and sexual normativity of "asexual resonance." Finally, it analyzes four works that have been accepted as aro/ace works in contemporary Japan and discusses the problems of relying on scenes in which "absence" is a problematic issue, as developed in the visibility issue in the first section, as well as the possibility of other forms of expression.

As these perspectives are held not only by researchers but by people from all walks of life, the number of aro/ace works accepted as such will increase. Although it is important that a wide variety of aro/ace works be produced, we hope that more aro/ace works will be accepted as such and that more people will be able to find traces of asexuality in them.